自立活動の視点を取り入れた
一貫性のある支援を目指した連携強化

―　アセスメントシートと授業サポートメモの活用を通して　―

長期研修員　　高橋　博紀

《研究の概要》

本研究は、小学校の自閉症・情緒障害特別支援学級在籍児童に対し、自立活動の視点を取り入れた一貫性のある支援を行うために、特別支援学級と交流学級の連携を強化する実践である。その手立てとして、タブレット端末を活用し、即時性のある効率的な情報共有を行った。「アセスメントシート」では、児童一人一人の特性やニーズに基づいた学びを提供できるように、自立活動の視点を基に児童の実態を適切に把握し、自立活動の目標と支援方法を明確に設定した。さらに、「授業サポートメモ」では、一貫性のある支援ができるように、授業を担当する職員で児童の目標と支援方法の共有を図った。実践を通して、児童が安心して授業に参加し、意欲的に学習に取り組めるようになることを明らかにした。

キーワード　【特別支援教育　自閉症・情緒障害　自立活動　校内支援体制】

群馬県総合教育センター
分類記号：Ｉ０１－０８　令和５年度　２８２集

本報告書に掲載されている商品又はサービスなどの名称は、各社の商標又は登録商標です。
〈各社の商標又は登録商標〉
Google スプレッドシートは、Google LLC の商標又は登録商標です。
なお、本文中には™ マーク、® マークは明記していません。

Ⅰ　主題設定の理由

文部科学省「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議報告（Ｒ３）」では、特別支援教育を巡る状況と基本的な考え方が示された。特別な支援を受ける子供の数が増加する中で、特別支援教育を更に進展させていくため、「障害のある子供と障害のない子供が可能な限り共に教育を受けられる条件整備」と「一人一人の教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できるよう、連続性のある多様な学びの場の一層の充実・整備」の推進について書かれている。さらに、「特別支援学級と通常の学級の子供が共に学ぶ活動の充実」「関係機関の連携強化による切れ目のない支援の充実」など、インクルーシブ教育システムの構築に向けた特別支援教育の整備・連携強化も示されている。文部科学省「初等中等教育局特別支援教育課の特別支援教育資料（Ｒ４）」の中にある「通常学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」によると、公立小中学校の通常学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒の割合は、推定 8.8％と示されている。また、「特別支援教育の充実について（Ｒ５）」から、平成 24 年から令和４年の 10 年間の間に、特別支援教育を受ける児童生徒数、小中学校の特別支援学級数共に約２倍に増加していることが分かる。障害のある児童生徒等に対する指導の充実を加速させ、教員の専門性向上や支援体制構築を推進することが必要であると考える。

本県では群馬県教育委員会「第３期群馬県特別支援教育推進計画（令和５年度～令和９年度）」において、「第２期群馬県特別支援教育推進計画（平成 30 年～令和４年）」の成果と課題を踏まえ、「特別支援教育を、障害のある幼児児童生徒に限らず、学習上、生活上に困難を抱える全ての幼児児童生徒を対象に、県内全ての学校園で、一人一人の多様性を尊重し、その可能性を最大限に伸ばす教育」として捉えることが理念として掲げられている。基本施策Ⅰの「一人一人の教育的ニーズに応える指導・支援の充実」や基本施策Ⅲ「特別支援教育を推進する支援体制の整備」が、本研究の目指す取組に合致している。

研究協力校職員（以下、協力校）へアンケート調査を実施したところ、「日々の指導・支援に生かすために、特別支援学級在籍児童の情報を共有する必要がある（94.1％）」「特別支援学級在籍児童の学校生活をほとんど知らない・少し知っている（76.5％）」「特別支援学級へ児童の様子を見に行くことは、ほとんどない（82.4％）」という結果を得た。自由記述欄には、「適切な個別支援ができていない」「情報共有の方法や機会がない」などの課題も書かれていた。ほとんどの職員が情報の共有が必要と考えているが、時間的な余裕や機会がなく、児童の実態を把握しきれていない現状がうかがえた。さらに、「様々な支援方法について研修を受けたい（76.5％）」「児童の実態把握の方法について研修を受けたい（58.8％）」と回答した職員も多かった。現状に課題を感じているからこそ、特別支援教育についての体制づくりや個々のスキルアップで改善していきたいという傾向が明確になった。協力校では、教科担任制を積極的に導入しているため、教科ごとに授業者が異なる場合が多い。自閉症・情緒障害特別支援学級在籍児童は、小学校の教育課程に準じて学習を進めていくため、他の児童と同様に教科ごとに異なる授業者の授業を受けることになる。授業者によって児童への支援が異なり、児童が混乱したり負担を感じたりしている現状がある。そのため、交流学級の授業でも、障害に基づく様々な困難を改善・克服するために必要な知識・技能・態度及び習慣を養う自立活動の視点を取り入れた支援が必要となる。自立活動の視点で児童の実態把握を行うことで、特性や課題を客観的に分析し、適切な目標と支援方法を設定することができる。自立活動の指導は、教育課程の中に位置付け学校教育活動全般を通して行っているため、特別支援学級の指導・支援を共有し、交流学級の授業においても一貫性のある支援を行うことが望ましい。

以上のことから、自閉症・情緒障害特別支援学級在籍児童が安心して授業に参加し、意欲的に学習に取り組めるように、授業を担当する職員が自立活動の視点を取り入れた一貫性のある支援を可能にしたい。そのための児童の適切な実態把握と授業を担当する職員の即時性のある情報共有をすることによって、連携強化を図りたいと考え、本研究主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

自閉症・情緒障害特別支援学級在籍児童に対して、実態把握から自立活動の目標と支援方法を設定する「アセスメントシート」と、授業を担当する職員で目標と支援方法を共有して授業に生かす「授業サポートメモ」を用い、一貫性のある支援を行うことで、児童が安心して授業に参加したり、意欲的に学習に取り組んだりする姿につながることを明らかにする。

Ⅲ　研究の内容

1　基本的な考え方

(1)　児童の支援に関わる人たちとの連携の必要性と課題

自閉症・情緒障害特別支援学級在籍児童は、研究構想図（図１）に示すとおり、学校や医療、福祉などの多くの人が支援に関わっている。児童によっては、もっと多くの専門家や機関が関わっている場合もある。児童の支援に関わる人たちが連携することによって、それぞれの専門分野の知識や技術が最大限に生かされると考える。一貫性のある支援が行われると、児童が安心して落ち着いた生活ができる。しかし、その方法や機会が十分に設定されていないことが課題である。学校や医療、福祉など様々な立場の人が意見交換を行う機会や方法を設定することで、児童の様子を多角的に把握し、指導・支援の方向性を明確にすることができると考える。

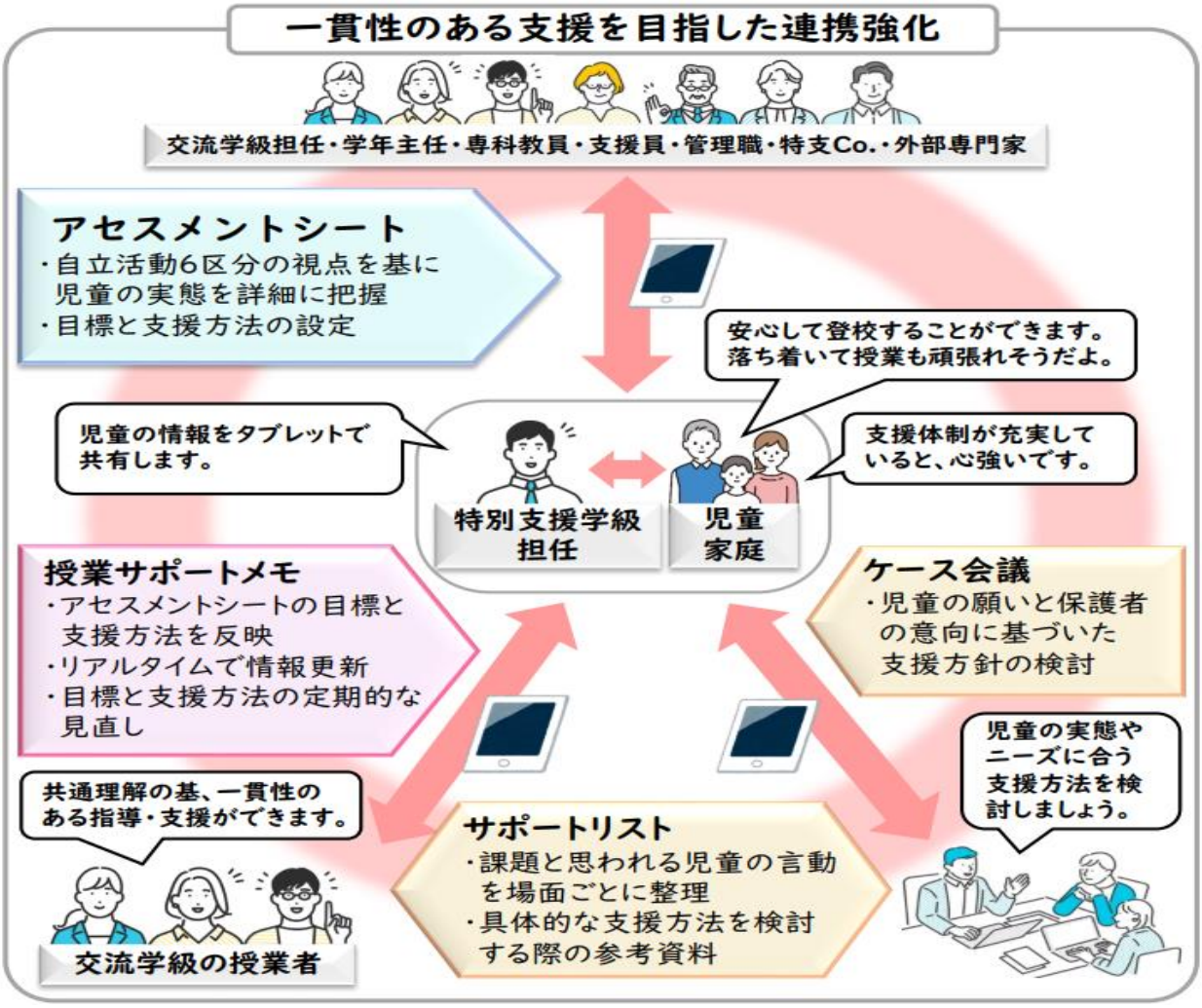


図１　研究構想図

(2)　特別支援学級担任と交流学級担任の連携の必要性と課題

自閉症・情緒障害特別支援学級在籍児童は、障害や特性による学習上又は生活上の困難を抱えている上に、複数の教科学習に加え、学校行事・給食・清掃など、交流学級で過ごす時間が長い。適切な支援

が受けられなければ、児童は安心して学習や生活をすることが難しい。それを改善・克服するために、自立活動の視点を取り入れた支援と情報共有が不可欠である。しかし、特別支援学級担任と交流学級担任ともに多忙なため、児童の実態に適した支援方法についての共有が不足しており、交流学級の授業で適切な支援が行われていないケースがある。特別支援学級担任と交流学級担任が互いの知り得た情報や考え方を共有し、日々の指導・支援に生かすことが大切である。そこで、特別支援学級の自立活動の目標と支援方法についての情報共有を行い、特別支援学級担任と交流学級担任が連携を強化することで、一貫性のある支援を目指していく必要がある。

(3)　一貫性のある支援とは

授業を担当する職員の主観による児童の実態把握では、目標と支援方法の内容が曖昧になる。また、適切な支援方法について情報共有が十分でないと、関わる人によって支援が異なってしまう恐れがある。適切な実態把握を根拠とし、どの場面でも、どの人からも共有された方針に基づいた支援を受けられることが、児童にとって重要である。本研究では、児童の授業を担当する職員が情報共有と共通理解を図り、どの授業でも児童が安心して取り組めるように児童の実態に合わせた共通の支援を行うことを、一貫性のある支援と考える。

(4)　自立活動の視点を取り入れるメリット

特別支援教育では、児童一人一人の実態把握が指導・支援の基礎となるため、特性や課題と思われる言動を適切に分析することが大切である。しかし、自立活動の知識や理解がなく、漠然と指導・支援が行われていることがある。自立活動の視点を取り入れたアセスメントシートを活用することで、特別支援学級担任は、児童の実態を客観的に把握し、長期的目標・短期的目標・支援方法の順に設定することができるようになる。さらに、アセスメントシートを反映した各授業で必要な支援方法を、授業サポートメモで授業を担当する職員で共有し、明確な根拠に基づく一貫性のある支援を行うことができる。

(5)　即時性のある効率的な情報共有

協力校では、「直接話をする機会を設定する」「インターフォンを使って話をする」「必要事項を書いたメモを渡す」などを軸に情報共有を図ることが多い。また、特別支援学級担任が個別の教育支援計画と個別の指導計画を作成しているが、日常的に活用したり、他の職員へ周知したりする機会が少なく、十分に活用しきれていない現状がある。そこで、本研究では、タブレット端末を活用した即時性のある効率的な情報共有を行うことで、必要な情報を手元で手軽に確認したり、共同編集したりすることができる。急な授業変更や授業中の児童の様子も、リアルタイムで共有できるようにする。

(6)　連携強化とは

タブレット端末を活用して、自立活動の視点を取り入れた目標と支援方法や授業中の児童の様子を共有することで、授業を担当する職員が一貫性のある支援ができるようになることを、本研究における連携強化とする。タブレット端末での情報共有をきっかけに、授業を担当する職員が、自立活動の視点を取り入れた支援方法や児童の様子について情報交換をする機会が増えることも期待できる。さらに、児童本人の願いや保護者の意向を踏まえ、ケース会議などを設定することで、管理職を含めた児童の支援に関わる職員が連携することを推進する。

２　手立ての概要

児童の実態を基に目標や支援方法をまとめた資料を作成しても、授業を担当する職員が、それを日常的に目にして活用できるものでなければならない。本研究では、Googleスプレッドシートで「アセスメントシート」「授業サポートメモ」「サポートリスト」「ケース会議共有シート」を作成し、全てをタブレット端末に集約する。タブを切り替えるだけで、授業を担当する職員が必要な情報を即時に共有でき、あらゆる場面で指導・支援に活用できるようにする。

(1)　アセスメントシート

特別支援学級担任が、児童の実態を客観的に把握する際のチェック項目の一覧表と、それを根拠に自立活動の目標と支援方法を設定できるシートである。自立活動の６区分27項目を参考に作成し、児童の実態を把握しやすいように、自閉症・情緒障害特別支援学級在籍児童の生活の中で関連性が高いと考え

られる項目を選定してある。各項目のプルダウン（◎：80～100％できる　○：40～70％できる　▲：０～30％できる）から記号を一つ選択し、児童の特性や課題を明確にした上で、目標と具体的な支援方法を設定できるようにする（図２）。

区分ごとに実態を分析し、それぞれ一つずつ最優先課題と思われる項目を長期的目標（今年度中の目標）にする。課題となる姿を踏まえて短期的目標（各学期中の特別支援学級の目標）と目標を達成するための具体的な支援方法を作成する。特別支援学級での自立活動の目標と支援方法が交流学級の授業でも反映されるように、各教科の特性を考慮しながら授業で必要な支援方法を定める。

図２　アセスメントシート

(2)　授業サポートメモ

アセスメントシートの内容を反映し、交流学級の授業でも児童の自立活動の目標と支援方法の共有を図るためのシートである（図３）。交流学級担任が毎週作成する学習予定表のデータと連動しているため、入力された教科名・単元名・場所・主な活動内容が授業サポートメモにも自動的に反映される。１週間の学習予定が１枚のシートに集約されており、タブレット端末でいつでも確認することができる。特別支援学級担任は、一単位授業ごとに想定される児童の言動や困難を想定しながら、交流学級の授業者に特に行ってほしい支援を、支援の欄にプルダウンで選択しておく。また、特別支援学級担任と交流学級の授業者が双方向のやり取りをする手段としても活用でき、必要な支援方法を明確にした授業づくりができる。各授業者が授業中の児童の様子を顔文字やコメントで入力することで、授業を担当する職員が瞬時に情報を共有し、引き継ぎを行うことができる。次の授業者は、現在の児童の様子を考慮に入れ、更に本時の授業で必要な支援方法を確認してから授業に臨むことができる。できる限りプルダウン形式を取り入れ文章の入力を最小限にし、短時間でメモが完成する構造により、効率的な情報共有による一貫性のある支援と業務の効率化を図る。

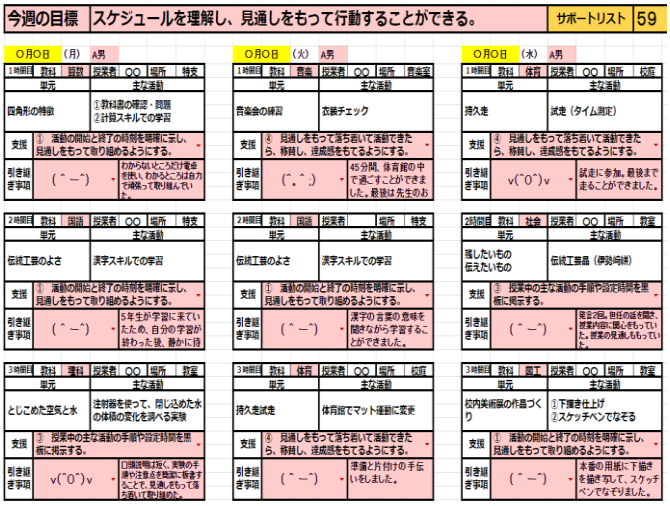
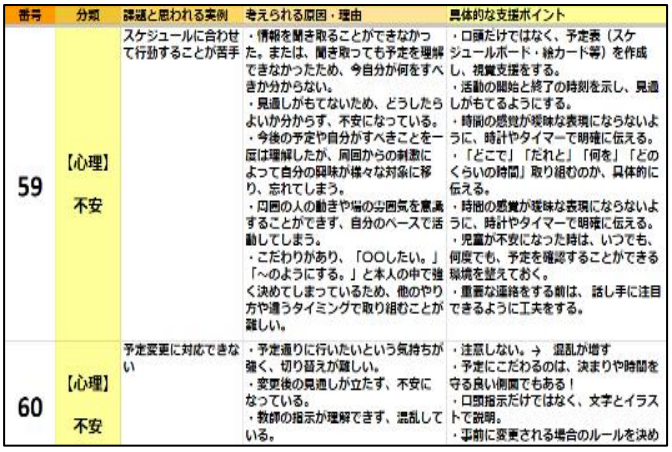


図３　授業サポートメモ

(3)　サポートリスト

課題と思われる児童の言動を場面ごとに整理し、原因や理由を分析して、具体的な支援方法を検討する際の参考資料である（図４）。「行動」「コミュニケーション」「人間関係」「心理」「学習」「家庭」の六つのジャンルに分類し、よく見られる実例を一覧表にまとめてある。様々なケースを想定し、一つの実例に対し、複数の考えられる原因や理由と具体的な支援方法が書かれている。箇条書きのシンプルな文章で表記し、タブレット端末で共有することで、授業を担当する職



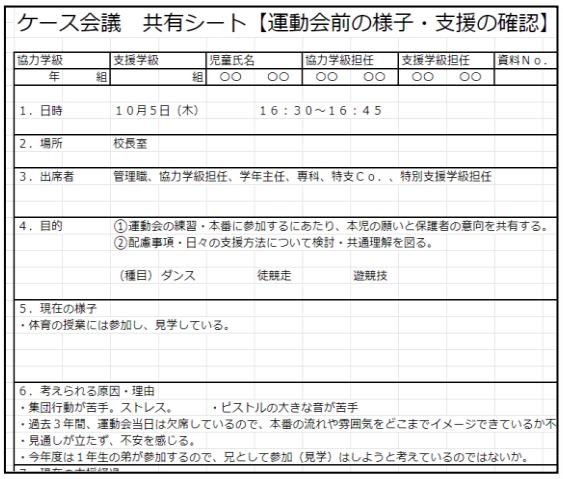
番号	分類	課題と思われる実例	考えられる原因・理由	具体的な支援ポイント
59	【心理】不安	スケジュールに合わせて行動することが苦手	・情報を聞き取ることができなかった。または、聞き取っても予定を理解できなかったため、今自分が何をすべきか分からない。 ・見通しがもてないため、どうしたらよいか分からず、不安になっている。 ・今後の予定や自分がすべきことを一応は理解したが、周囲からの刺激によって自分の興味が様々な対象に移り、忘れてしまう。 ・周囲の人の動きや場の雰囲気を意識することができず、自分のペースで活動してしまう。 ・こだわりがあり、「○○したい。」「～のようにする。」と本人の中で強く決めてしまっているため、他のやり方や違うタイミングで取り組むことが難しい。	・口頭だけではなく、予定表（スケジュールボード・絵カード等）を作成し、視覚支援をする。 ・活動の開始と終了の時刻を示し、見通しがもてるようにする。 ・時間の感覚が曖昧な表現にならないように、時計やタイマーで明確に伝える。 ・「どこで」「だれと」「何を」「どのくらいの時間」取り組むのか、具体的に伝える。 ・時間の感覚が曖昧な表現にならないように、時計やタイマーで明確に伝える。 ・児童が不安になった時は、いつでも、何度でも、予定を確認することができる環境を整えておく。 ・重要な連絡をする前は、話し手に注目できるように工夫をする。
60	【心理】不安	予定変更に対応できない	・予定通りに行いたいという気持ちが強く、切り替えが難しい。 ・変更後の見通しが立たず、不安になっている。 ・教師の指示が理解できず、混乱している。	・注意しない。→　混乱が増す ・予定にこだわるのは、決まりや時間を守る良い側面でもある！ ・口頭指示だけではなく、文字とイラストで説明。 ・事前に変更される場合のルールを決め

図４　サポートリスト

員が必要な時にいつでも確認し、支援に役立てることができる。特別支援学級在籍児童に限らず、通常学級においても特別な支援を必要とする児童の実態把握や支援のヒントとして活用できる。

(4)　ケース会議共有シート

授業を担当する職員がケース会議に必要な情報をそれぞれ入力し、タブレット端末で共有するためのシートである（図５）。協力校の年間行事予定に合わせてケース会議を設定し、児童本人の願いや保護者の意向に基づいた支援方針を検討する。タブレット端末で日頃から共有されている児童の実態や課題に加え、授業を担当する職員が入力した重要な情報や意見についても、ケース会議の参加者は事前に確認してから会議を行うため、議題を絞って短時間に効率的な話合いを行うことができる。ケース会議を行うことで、特別支援学級担任の主観ではなく、組織としてどうすべきかを考える視点が、一貫性のある支援を実現すると考える。


ケース会議　共有シート【運動会前の様子・支援の確認】

協力学級	支援学級	児童氏名	協力学級担任	支援学級担任	資料Ｎｏ．
年　組	組	○○　○○	○○　○○	○○　○○	

１．日時	１０月５日（木）　１６：３０～１６：４５
２．場所	校長室
３．出席者	管理職、協力学級担任、学年主任、専科、特支Ｃｏ．、特別支援学級担任
４．目的	①運動会の練習・本番に参加するにあたり、本児の願いと保護者の意向を共有する。 ②配慮事項・日々の支援方法について検討・共通理解を図る。 （種目）ダンス　徒競走　遊競技
５．現在の様子	・体育の授業には参加し、見学している。
６．考えられる原因・理由	・集団行動が苦手。ストレス。　・ピストルの大きな音が苦手 ・過去３年間、運動会当日は欠席しているので、本番の流れや雰囲気をどこまでイメージできているか不 ・見通しが立たず、不安を感じる。 ・今年度は１年生の弟が参加するので、兄として参加（見学）はしようと考えているのではないか。

図５　ケース会議共有シート

Ⅳ　実践計画

１　対象児童

研究協力校　自閉症・情緒障害特別支援学級在籍児童　３名

対象児童Ａ（第４学年）	対象児童Ｂ（第５学年）	対象児童Ｃ（第５学年）
・授業で関わる職員５名。 ・こだわりが強く、自分のやり方に固執することがある。 ・見通しをもって行動することや急な予定変更に折り合いをつけることが苦手である。 ・集団活動が苦手で、大勢がいる場所に居続けることが難しい。 ・周囲の刺激に反応しやすく、集中力の継続が難しい。 ・大勢が来校する学校行事は心身共に負担が大きく、当日は欠席することがある。 ・活動の目的が明確で納得できると、落ち着いて取り組むことができる。	・授業で関わる職員７名。 ・几帳面な一面があり、納得のいく文字が書けるまで消したり書いたりを繰り返すことが多い。また、ドリル等の問題は最初から順に全て記入し、順番を変更したり、未記入の問題をそのままにして次に進んだりすることは難しい。 ・運動会当日は参加できるが、練習では失敗を恐れて強い不安を感じることがある。 ・状況や場面に合わない言葉遣いや声量で話すことがある。 ・精神的な疲労が蓄積すると、遅刻することがある。	・授業で関わる職員７名。 ・周囲の他児童の行動に合わせて行動する能力が高く、授業者から見て活動に問題がないと思われる場面でも、本人はストレスや不安を感じている場合がある。 ・困り感を周囲に伝えることが苦手で、疲労が蓄積すると欠席することがある。 ・自分の思いや考えを文章に書く活動が苦手である。 ・交流学級の学習予定表の進度に沿って、学習を進めることができる。

２　実践期間

令和５年10月16日から11月10日

３　実践内容

アセスメントシートと授業サポートメモを活用して児童の情報共有を行うことで、授業を担当する職員の連携を強化し、自立活動の視点を取り入れた一貫性のある支援を実現する。また、Googleスプレ

ッドシートの同一ファイル内に作成した、交流学級の学習予定表・サポートリスト・ケース会議共有シートで効率的な情報共有を図る。

4　検証計画

	検証対象・検証の視点	検証方法
対象児童	○運動会前の変則的なスケジュールに見通しをもって安心して授業に参加できたか。 ○学習に意欲的に取り組めたか。	○児童の態度や表情を観察したり、タブレット端末で撮影をして記録を残したりし、実践前と比較する。 ○ワークシート・ノート・授業への参加時間等から、学習への意欲や理解度を把握し、実践前と比較する。 ○児童への聞き取り調査を行い、授業に参加する際の不安や達成感等を実践前と比較する。
関係職員	○特別支援学級で行われている自立活動の目標と支援方法を授業サポートメモで共有し、交流学級の授業で一貫性のある支援ができたか。 ○学習予定表・サポートリスト・ケース会議共有シートの連動により、効率的な情報共有と連携強化が図られたか。	○実践で使用したGoogleスプレッドシートの記録から、一貫性のある支援を図った成果と課題を検証する。 ○アンケート調査・聞き取り調査から、タブレット端末を活用した情報共有による連携強化の有効性を検証する。

Ⅴ　実践の結果と考察

1　アセスメントシートの活用

特別支援学級担任は、アセスメントシートのプルダウンで各項目にチェックを入れ、児童の実態を客観的に把握する。児童Ａの場合、最優先の課題と考えられる項目（今年度の目標）は、「スケジュールを理解し、見通しをもって行動することができる。」と判断した。そこに、日頃から見られる課題となる姿を踏まえて、図６に示すように特別支援学級の目標と支援方法を設定することができた。根拠に基づいた実態把握から、特別支援学級で自立活動の指導を行うことができた。さらに、「授業の開始時刻に着席できるように、時計とチャイムを常に意識して生活するように言葉を掛ける。」また、「気持ちが乱れることなく切り替えられるように、できる限り活動の開始と終了の時刻を明示する。」などの具体的な支援を行うことができた。

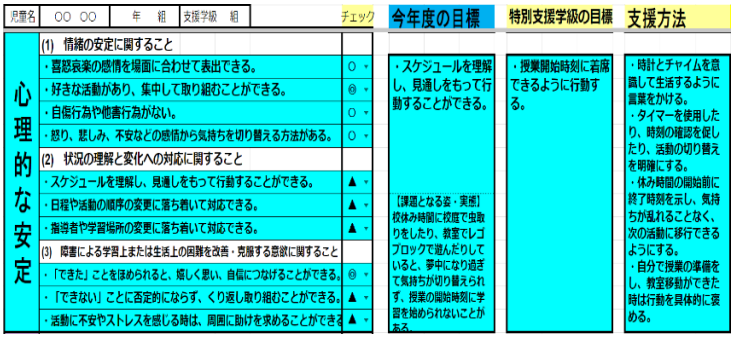


図６　児童Ａのアセスメントシート

2　授業サポートメモの事前入力

特別支援学級担任は、交流学級の授業で児童Ａに必要な支援方法をプルダウンで選択できるように設定しておく（図７の①～④）。この理科の授業の場合は、「③授業中の主な活動の手順や設定時間を黒板に掲示する。」の支援方法を選択した。

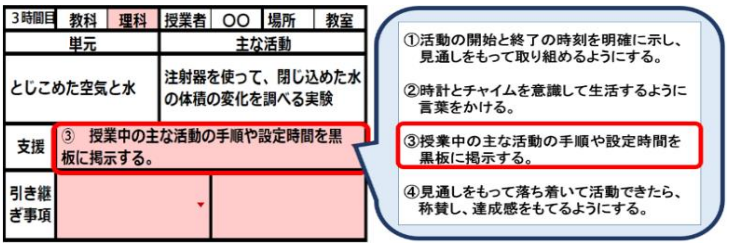


図７　交流学級の授業者に支援してほしいポイント

交流学級の授業者は、タブレット端末で本時に必要な支援方法を確認し、授業に臨む。具体的な実践については、以下の「３　授業サポートメモの活用と児童の変容」で示す。

３　授業サポートメモの活用と児童の変容

(1)　児童Ａ

最優先の目標と特別支援学級の指導・支援	交流学級の授業でも共有を図りたい支援
「スケジュールを理解し、見通しをもって行動することができる。」 活動の見通しをもてるように、毎朝児童Ａ専用のホワイトボードで時間割を一緒に確認する。授業変更がある場合は、詳細を交流学級担任へ直接確認しに行く習慣が身に付くように、その都度言葉を掛け、確認事項を伝えてから送り出す。 授業の開始時刻に着席できるように、休み時間の開始と終了の時刻を明示し、時計とチャイムを意識して行動するよう言葉を掛ける。	①活動の開始と終了の時刻を明確に示し、見通しをもって取り組めるようにする。 ②時計とチャイムを意識して生活するように言葉を掛ける。 ③授業中の主な活動の手順や設定時間を黒板に掲示する。 ④見通しをもって落ち着いて活動できたら、称賛し、達成感をもてるようにする。

実践で見られた児童の変容【理科「とじこめた空気と水」の授業で、③の支援を共有（図８）】
交流学級の授業者が行った支援を「下線」、支援によって児童に見られたよい変容を「下線」とする。

実験用注射器を使って水の体積を押し縮めることができるかを確かめる実験をした。見通しをもてるように、授業者は授業の冒頭に本時の活動の手順を簡潔に説明した。口頭説明が短く端的で、全ての児童にとって聞き取りやすかった。大型電子黒板にデジタル教科書の写真を映し、黒板に実験のねらいと手順を書き、視覚的な支援を意識した板書の工夫をした。いつでも活動の流れを確認できる環境設定がされていた。児童Ａは授業者の顔を見ながら話を聞き、実験が始まってからも集中が途切れることなく、注射器を押しながら手応えと水のかさの変化を確認していた。「空気はバネみたいだったけど、水はすごく固い。レンガみたい。」と、空気を押し縮めた実験との違いを言語化することができた。日頃は10～15分程度着席していることが精一杯な様子だが、適切な環境設定と必要な支援を行った結果、落ち着いて授業に参加し、集中して学習に取り組むことにつながった。

今週の目標	スケジュールを理解し、見通しをもって行動することができる。					
３時間目	教科	理科	授業者	○○	場所	教室
単元			主な活動			
とじこめた空気と水			注射器を使って、閉じ込めた水の体積の変化を調べる実験			
支援	③　授業中の主な活動の手順や設定時間を黒板に掲示する。					
引き継ぎ事項	v(^0^)v		口頭説明は短く、実験の手順や注意点を簡潔に板書することで、見通しをもって落ち着いて取り組めた。			

図８　理科の授業サポートメモ

実践で見られた児童の変容【体育「運動会の練習」の授業で、①の支援を共有（図９）】

学年合同で、ダンスと遊競技の練習を行った。集団行動が苦手なため、体育の授業はいつも15分程度見学をして特別支援学級に戻ることが多い。「前半は、入場から退場まで通してダンスの練習をします。ＣＤラジカセで音楽をかける仕事をお願いします。後半は、遊競技のだるま運びリレーの練習をします。みんなが入場して整列したら、自分の座る位置に来てください。」と、活動の見通しがもてるように、授業者は簡潔に本時の流れを説明し、意図的に役割を与えたことで、児童Ａにとって授業に参加する意義が高まった。他児童の入退場のタイミングに合わせて音楽を再生したり停止したりする役割に、責任をもって集中して取り組んだ。ダンスが終わると、遊競技で使う道具を運ぶ手伝いも意欲的に行った。他児童が遊競技の並び方に整列し終えると、自分の位置を確かめて着席した。４人で協力してだるまを運び、自分の順番が終わって

３時間目	教科	体育	授業者	学年	場所	校庭
単元			主な活動			
運動会練習			○ダンス ○遊競技			
支援	①　活動の開始と終了の時刻を明確に示し、見通しをもって取り組めるようにする。					
引き継ぎ事項	(^―^)		準備のお手伝いを頑張る。だるま運びリレーに参加できた。前回参加できたことで、見通しがもてていた。			

図９　体育の授業サポートメモ

も、競技終了までその場に着席していることができた。授業に最後まで参加することができた。	
有効な点	改善点
・授業サポートメモを活用して、特別支援学級と交流学級の連携が強化されたことで、学校生活全般を通して、スケジュールや時計を意識して行動する習慣が身に付き始めた。 ・簡潔な口頭指示と視覚支援の充実によって活動の見通しをもてるようになり、安心して交流学級の授業を受ける様子が見られた。 ・授業中に意図的に役割や発言の機会を設定したことで、自己有用感と達成感を得られる場面が見られた。	・運動会の練習計画（日程・時数・場所）は変更になる場合が多いため、その都度迅速に伝達することができると、児童Ａが更に見通しをもって授業に参加することができる。 ・即時性のある情報共有を徹底するために、授業を担当する職員がタブレット端末を活用する意識を高める必要がある。 ・児童Ａが見通しをもって行動することができるようになってきたので、常に実態に適したものとなるように、授業サポートメモで共有している目標と支援方法について、授業を担当する職員で見直しをする必要がある。

(2)　児童Ｂ

最優先の目標と特別支援学級の指導・支援	交流学級の授業でも共有を図りたい支援
「状況や場面にふさわしい言葉遣い・声の大きさで話すことができる。」 思ったことを衝動的に発言することがあるため、その場に合った発言ができるように、発言を止めるだけではなく、その場にふさわしい話し方を教える。 学習活動に合った声量を体験的に理解できるように、数字で目安を伝えたり、手本を示したりする。	①声量を５段階（小1-2-3-4-5大）で説明し、適切な声量の目安が分かるように支援する。 ②本児の前で適切な話し方の見本を示し、実践しながら体験的に理解できるようにする。 ③授業中の発言・発表・話合い・音読・合唱・号令など、場面に合わせた適切な声量を指導する。 ④見通しをもってやり方を理解すれば自分で取り組むことができるため、具体的に説明をする。

実践で見られた児童の変容【音楽「こげよマイケル」の授業で、②の支援を共有（図10）】

グループごとに三部合唱の発表をした。児童Ｂは自分が気持ちよく歌うことだけを考え、とても大きな声で歌っていた。授業者が裏声を使ったり抑揚をつけて歌ったりして、児童Ｂの前で実際に手本を示したことで、適切な発声の仕方や声量がイメージできた様子だった。他児童の歌声に合わせて自分の歌声を重ねる意識ができるようになった。発表本番では、他児童と一緒に、綺麗なハーモニーを目指して歌うことができた。課題となっている発声の仕方や声量を体験的に理解することができた。いつもより笑顔が多く見られ、とても楽しそうに取り組んでいた。

今週の目標　状況や場面にふさわしい言葉遣い・声の大きさで話すことができる。

2時間目	教科	音楽	授業者	専科	場所	音楽室
単元			主な活動			
こげよマイケル			パート練習で音程を正しくとれるようにする			
支援	②　本児の前で適切な話し方の見本を示し、実践しながら体験的に理解できるようにする。					
引き継ぎ事項	v(^O^)v		音程を正しくとるのが苦手で教師が少しずつ音とりをしたのですが、嫌になる事もなくみんなの声を聞いて正しく歌えるようになりました			

図 10　音楽の授業サポートメモ

実践で見られた児童の変容【英語「Where is the post office?」の授業で、③の支援を共有（図11）】

授業者が「発音練習」「英語の歌」「ペアで会話練習」と場面に合わせた話し方の手本を示したことで、活動に応じて発声の仕方や声量を調節することができた。前置詞(on, in, under, by)をリズムに合わせて歌いながら覚える活動では、適切な声量で楽しそうに発音練習をしていた。授業者がデモンストレーションとして実際の会話の様子を示したことで、ペアで道案内の会話練習をする際は、相手の顔を見ながら、問いかけるように話していた。明るい表情で、意欲的に授業に参加することできた。

3時間目	教科	英語	授業者	○○	場所	教室
単元			主な活動			
Where is the post office?			道案内の表現の学習			
支援	③　授業中の発言・発表・話し合い・音読・合唱・号令など、場面に合わせた適切な声量を指導する。					
引き継ぎ事項	v(^O^)v		発音や歌など元気に声を出していた。ペア学習も楽しそうに取り組めた。声の大きさは、活動に適していた。			

図 11　英語の授業サポートメモ

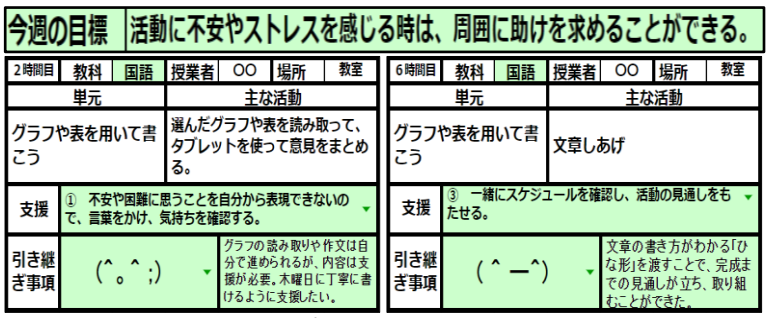
有効な点	改善点
・真面目な性格で手本を見てまねをしようとする意識が高いので、授業者が児童Ｂに求める姿を目の前で実演することにより、適切な話し方や発声の仕方、声量を体験的に理解できるようになった。 ・授業者が学習活動（グループでの話合い・発表・合唱・音読等）によって目の前で手本を示したことで、適切な話し方や発声の仕方、声量を、実践を通して身に付けている様子が見られた。 ・周囲の状況を理解し、授業中に隣の席の児童に質問したり、授業者に助けを求めたりする際には、迷惑にならない程度の小さな声で話すことができた。	・学習に意欲的で、様々なことに興味を示すため、授業者の問い掛けに即座に返答したり、自分が話したいことを大きな声で発言したりする場面が見られた。授業サポートメモで共有している支援方法を教科の特性や活動に合わせて、より具体的に設定することが必要である。 ・自分のやるべき事に見通しをもてれば、自主的に取り組めるが、苦手な活動や見通しが立たない授業には、不安を感じて質問やつぶやきが増える様子が見られた。授業者が、視覚支援を取り入れた説明やより具体的な指示の出し方の工夫などができるように、サポートリストを活用して支援方法を見直す必要がある。

(3)　児童Ｃ

最優先の目標と特別支援学級の指導・支援	交流学級の授業でも共有を図りたい支援
「活動に不安やストレスを感じる時は、周囲に助けを求めることができる。」 不安やストレスを感じたら自分から周囲に伝えることができるように、質問の仕方や困っている状況を説明する例文を示す。 疲労が蓄積する前に休む必要性が分かるように、自分の気持ちや体の状態を振り返る機会を与える言葉掛けをする。	①不安や困難に思うことを自分から表現できないので、言葉を掛け、気持ちを確認する。 ②ペアやグループで活動する場合は、本児が頼れる児童と組ませる。 ③一緒にスケジュールを確認し、活動の見通しをもたせる。 ④「できている」ことを意図的にほめる機会を作り、自信につなげる。

実践で見られた児童の変容【国語「グラフや表を用いて書こう」の授業で、①の支援を共有（図12）】

教科書に例示されているグラフや表から一つ選び、読み取りや意見をまとめる学習をした。頭の中に意見があっても、文章にまとめることが困難な場合が多い。本時（図12左）も何から始めたらよいか分からない様子で、作業に取りかかることができなかった。



今週の目標　活動に不安やストレスを感じる時は、周囲に助けを求めることができる。

2時間目	教科	国語	授業者	OO	場所	教室
単元			主な活動			
グラフや表を用いて書こう			選んだグラフや表を読み取って、タブレットを使って意見をまとめる。			
支援	① 不安や困難に思うことを自分から表現できないので、言葉をかけ、気持ちを確認する。					
引き継ぎ事項	(^。^;)		グラフの読み取りや作文は自分で進められるが、内容は支援が必要。木曜日に丁寧に書けるように支援したい。			

6時間目	教科	国語	授業者	OO	場所	教室
単元			主な活動			
グラフや表を用いて書こう			文章しあげ			
支援	③ 一緒にスケジュールを確認し、活動の見通しをもたせる。					
引き継ぎ事項	(^ー^)		文章の書き方がわかる「ひな形」を渡すことで、完成までの見通しが立ち、取り組むことができた。			

図 12　国語の授業サポートメモ

授業者が児童Ｃの困り感に気付き、「分からない時や困った時は、先生を呼んでいいんだよ。」と言葉を掛けると、Ｃ男は「みんなの前では無理。」と言った。「じゃあ、手を挙げるだけでも合図になるよ。」と伝えると、「うん。」と答えた。困った時に助けを求める方法が分かり、安心した様子だった。

次の国語の授業（図12右）では、授業者が前時の様子を踏まえ、穴埋め式のテンプレートをヒントとして渡した。キーワードや自分の考えを空欄に当てはめながら入力すれば文章を作成することができるという見通しをもつことができ、集中して活動に取り組み始めた。さらに、本時の課題が明確になったため、分からない箇所があっても自分から授業者に質問する姿が見られた。授業者がタブレット端末に記録されている情報を参考に、自立活動の視点で前回より適切な支援を行った結果、児童Ｃは文章を最後まで書き上げることができた。

実践で見られた児童の変容【図工「校内美術展の作品を描こう」の授業で、①の支援を共有(図13)】

手持ち花火をする絵を描いた。持ち手の指の重なりや奥行きを表現することが難しい様子だった。授業者から、タブレット端末で写真を撮って関節に注目して描くと、曲がっている場所がよく分かると指示があった。手元で指を拡大した写真を見ながら描くことで、下描きができた。一度、授業者に見せに行き、よくできたところと、難しくて悩んでいるところを自分から説明している姿が見られた。授業者は「指はよく描けたね。次は爪をよく観察して描いてみてね。」と称賛と具体的なアドバイスをした。児童Ｃは、自分の席に戻ると、すぐに描き始めた。児童の実態に合致した支援と言葉掛けによって、やるべきことが明確になり、自信をもって取り組んでいる様子が見られた。

3時間目	教科	図工	授業者	○○	場所	教室
単元			主な活動			
校内美術展の絵			花火を持っている手を描く			
支援	① 不安や困難に思うことを自分から表現できないので、言葉をかけ、気持ちを確認する。					
引き継ぎ事項	(^。^;)		写真を見ながら手の下描きを終えた。次回はスケッチペンでなぞる。			

図 13　図工の授業サポートメモ

有効な点	改善点
・授業サポートメモに蓄積された児童Ｃの情報を参考に、授業者が意図的に話し掛けたり、教材を用意したり自立活動の視点を取り入れた支援を行うことで、安心して授業に参加し、意欲的に学習に取り組む姿が見られた。 ・授業サポートメモで児童Ｃの自立活動の目標や支援方法を共有し、授業者が周囲に助けを求める具体的な方法を示す支援を行った結果、児童Ｃは自分の言葉で困っている状況を説明できるようになった。	・座席の配置の工夫・補助的な教材の用意・視覚支援など、授業づくりや環境整備の参考となる支援方法を、授業サポートメモで更に具体的に共有していくことが重要である。 ・授業サポートメモを活用し、特別支援学級担任と交流学級の授業者が、授業で必要な支援方法や授業中の児童Ｃの様子について、もっと頻繁に情報交換を行う必要がある。

(4)　授業を担当する職員

有効な点	改善点
・授業サポートメモを活用して、授業者が事前に児童の様子や必要な支援方法を共有することで、自立活動の視点を取り入れた一貫性のある支援が行われる場面が見られた。 ・児童の様子を引き継ぐことで、次の時間の授業者は児童の現在の状態を予測して適切な対応ができるようになった。 ・学習予定表が共有のGoogleスプレッドシートで一覧表になっているため、予定変更が生じた際に授業を担当する職員が即座に加除修正できた場合は、最新の情報に更新された予定表を共有することができた。 ・授業を担当する職員が常に共有している情報を基礎に意見交換をすることで、打合せやケース会議の効率化を図ることができた。	・授業者が授業中にタブレット端末を使用しない又は使用する時間的な余裕がない場合は、情報の入力が遅れてしまうことがあった。多忙な場合は、休み時間・放課後・空き時間など、それぞれのタイミングで、できる限り最新の情報を共有する習慣が必要である。 ・授業サポートメモで共有している自立活動の目標と支援方法について、意見交換を行う機会を設定したり、サポートリストを参考にしたり、授業者が自立活動の視点を取り入れた支援を行いやすくする工夫が必要である。

4　サポートリストの活用

交流学級の授業者が、見通しをもって取り組むことを課題としている児童Ａの実態把握や具体的な支援方法の参考にするために、サポートリストを活用した（図15）。業サポートメモの目標と関連するサポートリスト番号（図14）を参考に、容易に検索して、確認することができた。

今週の目標	スケジュールを理解し、見通しをもって行動することができる。	サポートリスト	59

図 14　授業サポートメモの目標と関連するサポートリスト

番号	分類	課題と思われる実	考えられる原因・理由	具体的な支援ポイント
59	【心理】 不安	スケジュールに合わせて行動することが苦手	・情報を聞き取ることができなかった。又は、聞き取っても予定を理解できなかったため、今自分が何をすべきか分からない。 ・見通しがもてないため、どうしたらよいか分からず、不安になっている。 ・今後の予定や自分がすべきことを一度は理解したが、周囲からの刺激によって自分の興味が様々な対象に移り、忘れてしまう。 ・周囲の人の動きや場の雰囲気を意識することができず、自分のペースで活動してしまう。 ・こだわりがあり、「〇〇したい。」「～のようにする。」と本人の中で強く決めてしまっているため、他のやり方や違うタイミングで取り組むことが難しい。	・口頭での説明だけではなく、予定表（スケジュールボード・絵カード等）を作成し、視覚支援をする。 ・時間の感覚が曖昧な表現にならないように、時計やタイマーで明確に伝える。 ・重要な連絡をする前は、話し手に注目できるように工夫をする。 ・児童が不安になった時は、いつでも、何度でも、予定を確認することができる環境を整えておく。 ・活動の始めと終わりの時刻を示し、見通しをもたせる。 ・「どこで」「だれと」「何を」「どのくらいの時間」取り組むのか、具体的に伝える。

図 15　サポートリスト「59」の内容

5　ケース会議共有シートの活用

児童Ａは、昨年度までは運動会の練習を見学することが多く、本番当日は欠席していた。今年度の参加の方法について、授業を担当する職員で検討する必要があると判断し、ケース会議を行った。特別支援学級担任が児童本人の願いと保護者の意向を聞き取り、ケース会議共有シートに入力しておき、ケース会議参加者はタブレット端末で事前に確認してから、話合いを行った。ケース会議を受け、徒競走と遊競技に参加することと、ダンスを見学することを目標に、授業を担当する職員が支援することにした。ケース会議を受け、特別支援学級では、運動会当日の動きに向けて見通しがもてるようにするために、児童Ａの自立活動において、自分専用のスケジュール表を作成した（図16）。それにより、児童Ａは運動会への見通しを十分にもち、本番当日は遊競技のだるま運びリレーに参加し、徒競走とダンスは指定の場所で見学することができた。ケース会議共有シートと授業サポートメモの活用により、効率的な情報共有と共通理解を図ることができた。

運動会のスケジュール表
名前【　　】

種目	持ち物	並ぶ場所 (並び方)/ 見学場所
1.　ラジオ体操	赤白帽子をかぶる	団ごと・学年順に並ぶ →終わったらすぐ徒競走の準備
2.　５年　徒競走	はちまき	入場門・徒競走の並び方
3.　１・２年　徒競走	はちまき	
4.　３・４年　徒競走	はちまき	
5.　６年　徒競走	はちまき	
6.　１・２年　ダンス		
7.　５年　組立表現	裸足	
8.　３・４年　ダンス	手ぶくろ	
9.　６年　マーチング	楽器・着替え	
10.　１・２年　玉入れ	はちまき	
11.　３・４年　だるま運び	はちまき	
12.　５・６年　台風の目	はちまき	
13.　１・２年　リレー		
14.　３・４年　リレー		
15.　５・６年　リレー		
16.　閉会式		

図 16　自立活動で作成したスケジュール表

Ⅵ　研究の有効性に関する考察

1　アセスメントシートの有効性

本研究では、自閉症・情緒障害特別支援学級在籍児童を対象としたアセスメントシートを作成した。このシートを活用することで、特別支援教育についての専門性や経験の有無に関わらず、全ての職員が同じように自立活動の視点で児童の実態を客観的に分析し、適切に把握することができる。さらに、各項目の内容を調整することで、知的障害特別支援学級在籍児童や通常学級の特別な支援を要する児童の実態把握をする際にも活用することができる。学年や校種を問わず、全ての学校園で活用可能な汎用性があると考える。

2　授業サポートメモの有効性

授業サポートメモを活用することで、アセスメントシートによる児童の実態把握と自立活動の目標と支援方法を共有し、授業を担当する職員との連携を強化することで、どの授業においても一貫性のある支援を目指すことができた。また、即時性のある効率的な情報共有が可能なため、現在の児童の様子に合わせた臨機応変な対応もできた。さらに、１週間分の予定が１枚のシートに集約されており、授業を担当する職員が各授業で必要な支援方法や児童の様子を常に把握しているため、切れ目のない組織的な支援を推進することができた。

実践後の協力校職員へのアンケート調査より、「タブレット端末を活用した児童の情報共有は、交流学級の指導・支援に有効である」と回答した職員は、62.5%だった。主な意見として、「本日の児童の様子が分かると、対応する際の参考になる」「共有した児童の情報が記録として残り、児童に合わせた支援方法を意識して授業ができる」などがあり、一定の有効性が認められた。課題としては、「空き時間や放課後ならタブレット端末の確認や入力が可能だが、他の児童への対応で時間的に余裕がない場合は難しい」という意見があった。これらのことから、担当授業の前後が困難な場合は、20分休み・昼休み・放課後などにタブレット端末で情報を確認したり、引き継ぎ事項として顔文字の選択をしたりする習慣化ができるとよい。そのために、タブレット端末の確認を促すリマインドメッセージの設定や使いやすいシートに改良するなどの工夫を継続する必要があると考える。

３　サポートリストの有効性

実践後の協力校職員へのアンケート調査より、実践期間中に62.5%の職員がサポートリストを活用し、「どのような対応をするとよいか参考にした」「どのようなサポートが適切なのか参考にした」などの意見があった。これらのことから、特別支援学級に限らず、通常学級においても、特別な支援を必要としている児童の実態把握や具体的な支援方法の参考資料として活用することができたと考える。タブレット端末で共有しているため、例え授業中であっても必要な時にいつでも確認することができる。また、より有効な支援方法や周知すべき新たな実例があった場合には、各職員がリストに追記していくことで、最新の情報を共有しながら支援を行うことができると考える。

４　ケース会議共有シートの有効性

本実践では、児童本人の願いと保護者の意向に基づき、運動会に向けて参加や見学の方法を具体的に検討し、共通理解を図った。特別支援学級の自立活動として運動会のプログラムから自分のスケジュール表を作ったことで、当日の流れに十分見通しをもて、児童が安心した表情で本番に参加する姿が見られた。

このシートを活用することで、それぞれの職員が得た情報を集約し、記録を蓄積しながら計画的にケース会議を設定することができる。また、情報が共有されていることを前提に議題を絞った話合いが可能になる。これは特別支援教育に関する会議に限らず、生徒指導や教育相談に関する会議にも有効であると考える。

５　研究対象児童の授業を担当する職員の意識調査

実践後の協力校職員へのアンケート調査より、「タブレット端末を活用した情報共有は、職員間の連携や支援体制づくりに有効である」という回答が75%だった。主な理由として、「児童の情報を簡単に引き継ぐことができる」「支援方法について、話し合うきっかけになる」「児童の特性や頑張っている様子を共有できる」などの意見があった。特別支援学級担任からは、「交流学級の授業に常に付き添うことができないので、それぞれの授業中の児童の様子を共有できて役立った」という意見があった。即時性のある情報共有により、現在の児童の様子に合わせて、頑張りを称賛したり、疲労や精神的な乱れをケアしたり、適切な対応ができるようになったと思われる。

有効でないと回答した職員の主な理由は、「日常的に業務が多忙なため、タブレット端末を活用した情報の入力や確認は難しい」「児童にトラブルが起きた際に情報を共有すればよい」だった。時間的に余裕がなく、現状に問題意識をもっていない職員にとっては、個々の児童のニーズに寄り添った指導・支援に向かう意識の必要性は高まらない様子が分かった。職員の負担感を軽減するために、手軽に使用できる授業サポートメモに改良を重ねていく必要を感じた。また、職員が適切な支援によって児童によい変容が見られる体験をしてもらえるように、支援方法の参考となるサポートリストの内容も充実していく必要がある。このように、児童にも職員にも利点がある工夫と継続的な取組が重要であると考える。

Ⅶ　研究のまとめ

１　成果

○　児童の実態を客観的に把握することで、自立活動の目標と支援方法が明確になり、特別支援学級で根拠に基づく自立活動を行うことができた。

○　タブレット端末を活用し、授業を担当する職員が自立活動の目標と支援方法を共有することで、交流学級の授業でも一貫性のある支援を行うことができた。

○　職員の連携が強化され、児童が安心して授業に参加し、意欲的に学習する姿が見られた。

○　児童のその日の様子を即時に共有することで、授業づくりや支援方法について、臨機応変な対応をすることができた。

○　ケース会議では、タブレット端末を通して事前に重要な情報を確認してから、効率的な話合いを実施することができた。

２　課題

○　毎日タブレット端末を使用する習慣がない職員やタブレット端末を用いた取組に負担を感じる職員がいる。情報共有の効率化と負担軽減を図るために、シートを更に改良していく必要がある。

○　特別支援教育に関する職員の知識・技能の差が、児童の環境に大きな影響を与えると考えられたため、意識改革やスキルアップを図る必要がある。

Ⅷ　提言

根拠に基づく児童の実態把握によって、適切な自立活動の目標と支援方法が設定できる。タブレット端末を活用した効率的な情報共有を通して、授業を担当する職員の連携が強化され、一貫性のある支援ができる。どの授業でも一貫性のある支援を受けられることで、特別な支援を要する全ての児童が安心して授業に参加し、意欲的に学習に取り組むことができる。本研究はタブレット端末を活用することによってすぐに実践が可能で、校種を問わず、全ての学校園で実践できる。様々な教育現場に活用できる汎用性があり、大いに成果が期待できると考える。

＜参考文献＞

・文部科学省　『障害のある子供の教育支援の手引』（2022）
・文部科学省　『新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議 報告』　(2021)
・文部科学省　『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説　自立活動編』　(2018)
・群馬県教育委員会　『第３期群馬県特別支援教育推進計画』（令和５年度～令和９年度）
・笹森　洋樹　『イラストでわかる特別支援サポート辞典』　合同出版（2015）
・添島　康夫　『発達障害のある子の「育ちの力」を引き出す150のサポート術』　明治図書出版(2014)

＜担当指導主事＞

澤田　佳祐　　町田　直紀